

# たまのよこやま

**新連載続々!!**

「支えるスタッフうさ」  
「あの遺跡は現在<sup>いま</sup>!?!」

**平成26年度企画展示  
開催中!!**

# 速報!

東京都埋蔵文化財センターの

# 楽しい体験イベント

2014/ 春

東京都埋蔵文化財センターでは、昔を「知る」、「作る」、「感じる」をコンセプトに、今年度もさまざまなイベントを企画しています。新たに、「縄文土偶作り体験」や「古代カマド作りと食体験」もありますので、どうか奮ってご参加ください。

さて、この5月3・4日の連休には、縄文の村恒例の「縄文ワクワク体験まつり2014」を実施しました。今年で早くも5回目を迎え、七つの縄文体験コーナーを設けて皆様をお迎えしました。幸い、両日とも好天に恵まれて実に、これまでで最高に近い1,400名以上の方々にお出いただきました。センター職員一同、感謝、感謝です!!

初日は、なんと朝早くから開場を待つ長蛇の列ができるほどの大人気で、実は私たちもびっくりしていました。皆さんのお目当ては、やはり毎年大人気の「勾玉作り」です。昨年から、1日4回転で実施しているのですが、1回にできる人数が限られているのと、仕上がりまで約90分近くかかるため、なかなかご希望に沿えない状況です。でも、今年も2日間で240名の方々にオリジナル勾玉を作りました。参加の皆さん、大事にしてくださいね!

数ある体験の中で、最も縄文的と言え、石斧で木を伐る」でしょうか。このコーナーは会場の最も奥まった場所で行っていましたが、気づかない方もいたかもしれません。丸木を地面に据えて、「磨製石斧」という道具で木を伐るといもの。最近、『Wood job!(ワッドジョブ)』という林業の映画が話題になっていますが、まさに、多摩丘陵の縄文人たちは森の民であり、コナラやクリ、トチの実などを食用にし、その樹木を材料や燃料とする生活をしてきたと考えられます。



斧で木を伐る～振り下ろすタイミングが大事

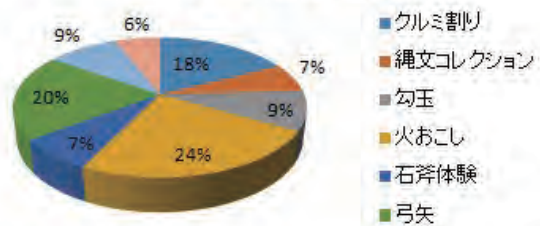
現代の縄文キッズたちは、ゴーグルを着用し、渾身の力で斧を振り下ろしていました。それで

も、20人くらいで木を半分に伐ることができ、何でも根気強く継続することで可能になることを知ってもらえたかな?

そして、今年、堂々人気ナンバーワンを獲得したのが、「火おこし体験」でした。私たち職員やボランティアスタッフが力を入れて指導に当たっているコーナーで、何とか皆さんに成功していただきたい一心で、行いました。ほぼ、マンツーマンで行うため、舞ぎりを動かすタイミングと火種から炎に変えるコツがうまく伝わるようにしました。はたして、どうだったでしょうか?私たちの生活でおそらく、一番大切な「火」。家の中で、コックをひねるだけでお湯や火が得られる今、やっとの思いで火をおこせた子どもたちは、いったい何を感じたのでしょうか? **火おこし体験～力を合わせて、もう一息!**



## イベント人気投票



●今年度の参加者アンケート調査で1位にランクされたのが、「火おこし体験」で146票を獲得しました。次いで「弓矢体験」、「クルミ割り体験」と続きます。小さなお子さんには、「ドングリアート」や「縄文コレクション」が人気だったようです。来年はもっと楽しめる企画にしますよ…。

これから、夏・秋にかけて、「トンボ玉作り」や「縄文食体験」をはじめ、祈りやマツリをテーマとした「文化財講演会」などが目白押しです。都心から電車でわずか30分、都立埋蔵文化財調査センターは、いつでもだれでも身近で楽しめる知のオアシスと言えます。(松崎元樹)

所在地：北区西ヶ原二丁目

調査期間：2012年2月～2014年2月

調査面積：10,067 m<sup>2</sup>

JR京浜東北線上中里駅で、大宮方面に向かって左側に目を向けますと、崖線<sup>がいせん</sup>を見つけることができます。御殿前遺跡は、この崖線の南側に広がる台地の縁辺で発見されています。本遺跡の発掘調査は、これまでに数多くの調査が積み重ねられてきており、縄文時代中期後半のムラ・弥生時代中期の墓地・弥生時代後期のムラと墓地等が見つっています。特に、豊嶋郡衙跡<sup>としまぐんが</sup>（古代の役所跡）の発見は、郡庁院と正倉院の両者が発見される等、全国的にも重要な成果として特筆されます。

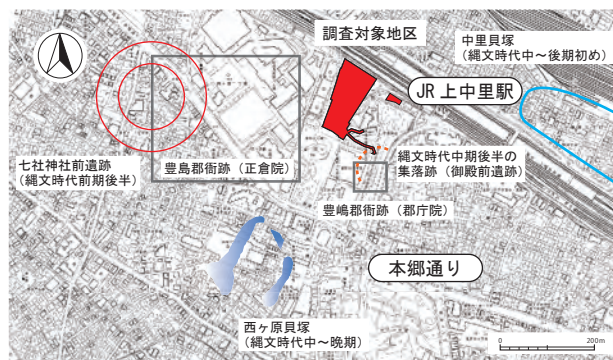
今回の発掘調査では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構や遺物、もしくは、遺物のみが発見されていますが、ここでは、縄文時代の調査成果について紹介します。まず、その頃の当地および周辺の様子ですが、早期から晩期前半にかけての遺構・遺物が見つっており、前期後半には、西側に隣接する七社神社前遺跡で、大きなムラがつくられています。中期後半には、本遺跡や南側に隣接する西ヶ原貝塚で大きなムラがつくられるようになり、近くには、貝の加工処理場跡である中里貝塚もあります。後期においても、西ヶ原貝塚等で断続的にムラがつくられており、当地およびその周辺は、縄文人の生活の跡が、色濃く残された場所といえるでしょう。

調査は、台地部の他、谷部も含む広い範囲を対象としましたが、前者では、ムラの外縁部にあたることから、遺構や遺物の発見数は少なかったです。後者では、早期から晩期前半の遺物が出土しており、特に、中期後半の土器が大量に出土しています。

遺構としては、中期後半につくられた16基の円



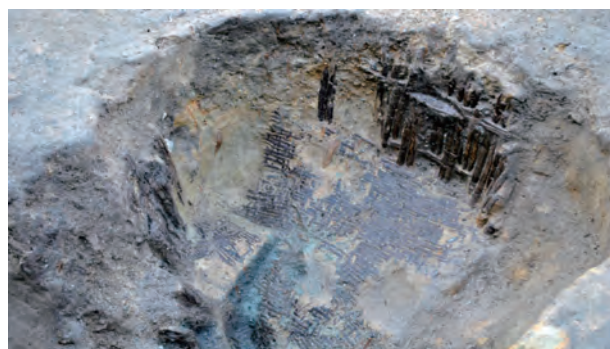
石敷き状遺構



調査対象地区と周辺の遺跡

形土坑を大きな成果としてあげることができます。これらは谷筋付近で発見されており、覆土中からクルミが見つかったものもあります。木の実等を貯蔵するためにつくられたのでしょうか。16基の内、2基の土坑からは、底面や側面に編組製品<sup>へんそせいひん</sup>（ササ類等の植物で編んだり組んだりしたもの）が残っており、全国的にも貴重な発見となりました。素材は、肉眼観察によると、タケ垂科（ササ類）の植物が予想されますが、今後、詳細な分析を行う予定です。この他、中期後半に使われたと思われる石敷き状遺構も注目されます。3m四方程の狭い範囲ですが、小石が敷き詰められたような状態で発見されました。軟弱な地面を石敷きにより改良することで、低地での活動をより行いやすくしたのかもしれない。

縄文時代中期後半の頃、当地の谷部は、台地上にあるムラから低地に向かうルートの中にあたっており、その先には、中里貝塚等がありました。台地上のムラ、谷部の水場、低地の貝加工処理場をセットで考察できる稀有な事例であり、当時の土地利用のあり方や生業を考える上で、様々なデータを提示してくれるものと思われます。（西澤 明）



土坑出土編組製品

# いま あの遺跡は現在！？ Vol.1

## —遺跡庭園「縄文の村」 多摩ニュータウン No.57 遺跡—

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査前と現在の写真を比べながら、調査後に遺跡の周辺がどのように変わったのかをご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

今回から始まりましたシリーズコラム「あの遺跡は現在！？」。第1回は、私達の職場、東京都立埋蔵文化財調査センターの遺跡庭園「縄文の村」（多摩ニュータウン No.57 遺跡）をご紹介します。

多摩ニュータウン No.57 遺跡は昭和45年から58年にかけて計4度の調査が行われました。調査によって旧石器時代と縄文時代、中世の遺構・遺物が見つかっています。

多摩ニュータウンの開発は昭和40年から始ま

り、平成17年までの40年に及びました。開発前の多摩丘陵は低く延びる丘とその間を流れる河川、そしてわずかな平地に田畑の広がる静かな農村が広がっていました。下の2枚の比較写真を見ると街の発展が見て取れます。

No.57遺跡は都の史跡として保護されることとなり、調査後に埋設保存され、庭園として公開されています。都内では珍しい住居内での火焚きや、縄文時代の植生も復元されています。（武内 啓）



写真1：北西から見た1970年のNo.57遺跡（左）とほぼ同じ位置から捉えた現在の風景（右）。遺跡のある丘陵は手前のマンションで見えにくいですが、送電塔の真下が遺跡庭園「縄文の村」になる。周囲に広がっていた田畑は住宅地とニュータウン通りに姿を変え、蛇行して流れていた乞田川は河川改修によってつけえられた。背後の丘陵には団地が造成された。左写真奥側の丘陵中ほどには吉祥院の屋根が見える。

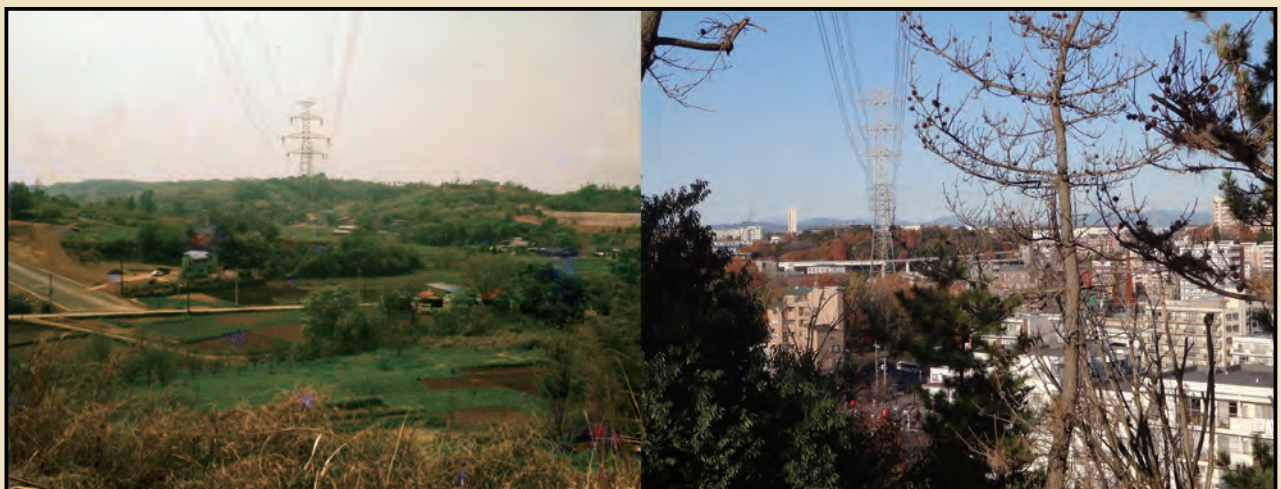


写真2：調査の始まったNo.57遺跡を南東方向から捉えた写真（左）と、現在の豊ヶ丘2丁目の送電塔付近より撮影した写真（右）。左写真の中段の太い坂道は現在の法務局多摩出張所前の坂で、多摩上之根橋南交差点が写っている。

続

# 大江戸掘りものの帖～ワ～

## 石材の行くすえ ～遺跡構築材の保存と活用～

本紙 95 号に引き続き、品川台場（第五）遺跡の石材のお話。

調査で発見された石垣<sup>とんじよ</sup>や屯所の建物基礎などの遺構は、基本的には元の位置のまま再び地中に保存されました。工事の影響を受ける範囲の基礎石や下水石組、そして大量に土中に含まれていた崩れた石垣石などの石材は、平成 24 年度分は石垣の前に積み重ねて埋設保存を行いました。平成 23 年度分は一部を竣工した品川台場食堂内【写真左】や敷地内に移設され土地の来歴が展示されましたが、残りは東京都公園協会に引き取られて、浜離宮恩賜庭園など



品川台場食堂前の石垣石展示



第一台場の石材（上）と汐留遺跡などの石材を活用した石垣（下）【都立武蔵野の森公園】

公園整備事業に今後活用される予定となっています。このように、第五台場の石材は東京都港湾局のご理解・ご協力により、幸いにも基本的には現地でも埋設保存されましたが、都心の遺跡では現地保存や移設保存の措置が困難なことが多く、廃棄処分を逃れる手段として、史跡や公園整備など有効利用の道を辿る石材も少なくありません。

都立武蔵野の森公園の府中市側にある花とユニファースの散策路には、直方体の大きな石材が 130 石余り積まれています。そこに「台場石」の標記を見つけることができます【写真右上】。これらは平成 9～11 年にりんかい線の工事で発見された第一台場の石垣石で、公園整備に伴う活用例です。昭



国史跡武蔵国分寺跡僧寺講堂跡 基壇復元工事のようす

【写真提供：国分寺市教育委員会】

和 30 年代には、東京港の開港に伴って撤去・埋没によって第二台場など複数の台場が姿を消しますが、その時に発生した多量の石材は、中央防波堤の根固め工事に利用されたほか公園整備にひろく活用され、その一部を都立明治公園（新宿区・渋谷区）や晴海ふ頭公園（中央区）・若洲海浜公園（江東区）などに見ることができます。

武蔵野の森公園には、品川台場以外にも汐留遺跡の石材がプロムナード脇の石垣として積み直されています【写真右下】。近年の調査では、環状第二号線地区（港区愛宕下遺跡）や新宿区市谷防研地区（新宿区市谷本村町遺跡）から出土した石材が、国史跡武蔵国分寺跡僧寺講堂跡（国分寺市）の基壇に敷設された階段の復元部材として生まれ変わり、史跡復元整備の場面で活躍しています【写真左下】。

このように新たなすがたとなって別の文化財や都市の景観を下支えする道は活用のひとつの方法として定着してきています。単なる石材の有効利用に留まらせないためにも、元の遺跡の来歴をどこまで反映させて活用できるかが、今後の大きな課題といえます。

（大八木謙司）

【協力】 富川武史、国分寺市教育委員会教育部ふるさと文化財課、（公財）東京都公園協会武蔵野の森公園サービスセンター

遺跡庭園「縄文の村」は、多摩ニュータウン No.57 遺跡の発掘成果を基盤として、1987年4月1日に開園しました。縄文時代の自然環境の復元を目指して植えられた多くの樹木も、当初は支柱を伴った頼りない<sup>かんぼく</sup>灌木ばかりでしたが、30年近く経った現在ではみな立派な大木に成長し、文字通り「縄文の森」となりました。新シリーズ第1回目の本号ではこの庭園を支える人たちを紹介します。



見学者を案内する

庭園はA、B、Cの3棟の復元住居を中心として、他にも2基の住居跡の模型などが設置されています。復元住居については、茅葺きの屋根や<sup>くたい</sup>躯体を保全するために、順番に屋内の炉で火焚きを行っています。また、樹木に関しても、落ち葉の処理はもちろんのこと、園内施設の清掃なども大切な作業となっています。ときどきは、専門職員に代わって復元住居について来園者に簡単な解説を行うこともありますし、園内の植物に関して、質問に答えることもあります。シルバー人材センターから派遣されたOさん、Mさん、Iさん、Kさんの4人が日々交代してこれらの作業に当たっています。

本日の火焚きはB棟で行います。Oさんは朝から薪の用意をし、



住居内での火焚き作業

住居内に展示するための弓矢や縄文土器の模造品を運びます。本日見学する6年生は、9時半から庭園にやってきます。Oさんはやや焦ります。というのも、火は、着火後しばらく

は大量の煙を出すからです。火を落ち着かせた状態で生徒たちを迎えたいと思っています。午後には生徒たちを相手にKさんによるやさしい語り口の解説が行われたようです。焚き火を見つめる先ほどまでのやんちゃ坊主が、遠い時代に思いを馳せる大人びた少年の顔に変わります。

早朝の通路ではMさんが清掃をはじめました。昨夜は強風の上、雨も降った



早朝、通路の落ち葉を清掃する

ので落ち葉を除去するのにやや手間がかかります。一方、秋口から出る大量の落ち葉は除去せずに通路に敷き詰めます。融けた霜柱がぬかるみとなるのを防ぐためです。また、育ち過ぎてやや密林化した樹木群からは枯れ木や折れ木なども発生します。これらの処理や観察もMさんたちの重要な仕事です。枯れ木は火焚きの燃料として使われます。

春先、勤務日以外でもIさんは写真を撮るために庭園にやってきます。木々



枯れ枝を伐って薪を作る

の間から見える空や草花などが被写体です。そのIさんが勤務中に心がけていることは、来園者との会話をおろそかにしないこと、しかしその一方、聞かれた質問に関して、曖昧な知識はなるべく控えること、だそうです。4人は現役時代第一線でバリバリ仕事をしてきた方々ばかりです。このようにして、人生経験豊かな人たちの節度ある対応や助力によって、今日も遺跡庭園は市民の皆さんに開かれた空間として適切に運営されています。(福田敏一)

多摩ニュータウン地域を東西に貫く京王相模原線の駅の一つに、京王堀之内駅があります。今回紹介する多摩ニュータウンNo.419・420遺跡の調査は、現在の京王堀之内駅のすぐ南側の地区で行いました。当時は、ニュータウン建設は進んでいましたが、大規模な丘陵開発の行われる直前の時期で、ここに鉄道の駅ができるという実感が持てなかったことをよく覚えています。

左下の写真は、発掘調査時の航空写真です。上方はすでに多摩

ニュータウンの開発で整地が進み、中央が発掘調査中の本遺跡、下方が当時の集落の様子で、三様の光景が共存していた時代相を写し出しています。

多摩ニュータウンNo.419・420遺跡は、八王子市堀之内にあり、大栗川中流域に位置します。No.419遺跡は段丘平坦面、隣接するNo.420遺跡は北側斜面地に立地しています。大栗川中流域の河岸段丘では、その後数多くの集落遺跡が調査されました。本遺跡の調査は、それらの本格的な調査の先駆けとなりました。

昭和55年と昭和57年の2度行われた発掘調査により、約14,000㎡の面積を調査し、以下の遺構が検出されました。縄文時代の集石4基、土坑

93基、奈良・平安時代の住居跡18軒、円形土坑6基、中・近世以降の柱穴群5カ所、竪穴状遺構4基、井戸跡11基、地下式横穴1基、墓跡群4カ所、山砂採掘坑1基、土坑73基、炭窯5基、溝21条と多様な遺構が調査されています。

この調査で注目されたのは、奈良・平安時代の集落跡です。カマドを持つ竪穴住居跡が18軒発見されました。集落の営まれた時期は、武蔵国分寺が創建されはじめた8世紀中葉から10世紀代にかけてです。集落を分析してみると、一

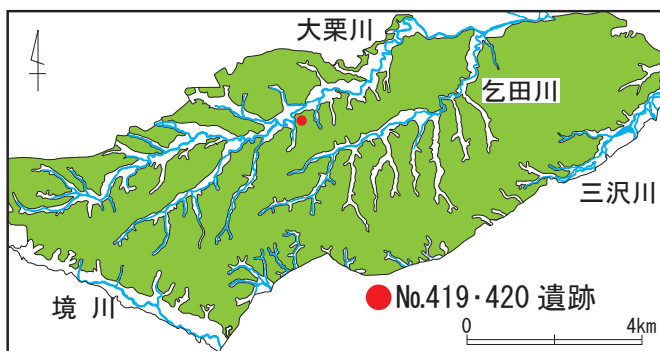
時期に数軒の竪穴住居で集落を構成していたことが判明しました。また、掘立柱建物跡は検出されていません。こうした小規模な竪穴住居のまとまりで構成される集落は、多摩ニュータウン地域では一般的で、丘陵各地に点在して営まれていたこともわかってきました。丘陵地に特有な集落構造の解明を進めた集落調査の一つと言えます。そして、No.419・420遺跡の集落が形成される時期は、多摩ニュータウン地域の古代の丘陵開発が本格的にはじまる時期に符合します。古代と現代の丘陵開発の足跡を教えてくださいました。

本遺跡の調査成果は、当センター調査報告第1集と第4集に収められています。（鶴間正昭）

# 1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

# 20・21 多摩ニュータウンNo.419・420遺跡



多摩ニュータウンの遺跡



4・7号住居跡



多摩ニュータウン No. 419・420 遺跡



14号住居跡遺物出土状態



10号住居跡遺物出土状態

# 『古代びとの祈りとマツリ』《縄文時代》



気候の温暖化や縄文海進等に伴い、食料生産基盤が安定し、それを維持することができるようになった縄文時代早期後半には、装身具の多様化・盛行が示すように、それまでに比べ精神文化も高揚したと考えられます。では、どんな精神文化だったのでしょうか？

文字を持たなかった縄文時代の精神文化は、「死と再生」を基層観念とし、神話と伝承、そして呪術により多様な自然環境に対応しようとする、“自然に祈りを捧げる”ものでした。そうした縄文人の“祈り”や“マツリ”を物語る道具は、その対象となる自然や願いが多様であったように、極めて多種多様です。また、祈りの場が設けられた場所やその装置の形態・規模にも、地域や時期による変化が看取され、各地に様々な遺構として遺されています。

今回の企画展示では、その中から、「自然に祈る」と「死と再生」をテーマに、人を含めた自然物全ての絶えざる循環を祈る道具として、動物との関係を示す遺物や土偶、石棒、人面装飾付土器、土鈴等を抽出し、その意味とあり方についての展示・解説を行っています。

なかでも、人の形をした土製品である土偶は、数ある祭祀具を代表するものです。胸の膨らみや体型、局部の表現等から、女性もしくは女神を表していると考えられています。紀元前 1 万年頃の草創期に出現した土偶ですが、頻繁に製作され祈りの道具として主役の座を得るようになるのは、関東地方では中期（紀元前 3 千年頃）になってからのことです。地域によって発達のと時期と程度及び変容のあり方に差異が存在したようで、形態や製作手法、使用方法も各地域で異なります。今回は、多摩丘陵を中心とした中期における土偶のあり方を通して、「死と再生」の祈りとマツリに注目してみました。かつては、悪いところを折って治癒を願う“人形”と同じように使われていたのではないかと考えられてもいましたが、家を建てる前に床下に埋められたものもあれば、墓に副葬されたものもあり、使い方は様々だったようです。また、全く壊されることなく土中に葬

られたものもあり、多様な願いに即した祈りの道具として用いられたことを示しています。

一方、中空の体内に焼成した粘土の玉や小石を入れて鳴子とした土鈴形土偶や土鈴は、子孫の繁栄や出産に関する儀式で、聖なる音を演出したことでしょう。土鈴形土偶の左隣に展示してある“子供を抱く土偶”（八王子市宮田遺跡出土）も体内が中空で、八王子市榎原遺跡出土の土鈴形土偶とほぼ同じ大きさの孔が底面に開けられています。もしかしたら、同じように用いられたのかもしれない。では、どんな音だったのでしょうか？今回の展示では、展示品からフィーチャーした 3 点の「祈りの音」を、実際に聞くことができます！使用したのは本物です。しかも、展示した土鈴の全てに、X線写真が添えられていて、外からは見ることでできない内部の様子が一目瞭然。3 点の音が異なるのはなぜかという疑問に、答が見つかることでしょう。さらに、出土した鳴子の粘土玉の実物も見ることができます。まるで、お腹の中にたくさんの子供や卵がいるみたいです。

それにしても、榎原遺跡出土の土鈴形土偶や東久留米市多聞寺前遺跡出土のイノシシ顔面装飾付土器における顔の表情のなんと優しいこと！子供を見守る母親そのものです。そこで、八王子市南八王子地区 No.17 遺跡出土のイノシシ形土製品の腹部に



イノシシ形土製品  
(八王子市郷土資料館所蔵)

注目！！下から覗くと小さな穴が 8 個。そう、オッパイです。イノシシの雌は、たくさんの子供を産むことから、多産・豊饒の象徴として特別な存在だったようです。縄文社会における母性や女性の位置が窺われると共に、女神を中心とした縄文人の神話が聞こえてくるようです。  
(江里口省三)

